

林文子先生を偲んで

林先生の思い出

高橋 正樹

東大の安田講堂が前年の冬に落ち、新宿のエネルギーはくすぶりながらも燃え尽きようとして、社会がようやく落ち着きを取り戻そうとしていた昭和45年の夏に、私は聖路加国際病院の放射線科を見学に行くこととなりました。大学の5年生でした。もちろん仕掛人は林先生でした。

巣鴨の先生のお宅は、ヨーロッパ風の本格的なアパートでした。古いけれども風格のあるそのビルは、今思うと林先生の感性にぴったりあっていましたようです。テンポの早い聖路加での一日を終えて帰ってくると、仄暗い電灯にうつしだされた高い天井の大きなお部屋の内部は、何だかとても落ち着いた雰囲気でした。さっそく林先生は夕食をつくり始めるのですが、こちらはそれほど広くない台所の隅の方においてあるテーブルの椅子に座りながら、料理をする林先生のお話のお相手をしました。

西欧風の縦長の格子窓越しに、道を隔てて広がる見事な緑が見えました。朝、窓越しに下の玄関脇を覗くと、他の部屋の住人の車がおいてありました。変わった車でした。「あれはフランスの車で、向こうでは学生がよく乗っているのよ」と言う林先生の説明でした。

そしていつのまにか私は放射線科医になっていたのです。医師になってからも、私の人生の節目節目には必ず林先生がいらして、良く相談に乗っていただきました。単身赴任で愛知医大に在籍していた頃、土曜日には逗子にお帰りになる先生とよくご一緒して、ずいぶん色々なお話をしました。先生はテキパキとして洞察が鋭く、先生独特のご意見をおもちでした。長くお付き合いすると、そうさせずにはいられなかったのだと言う事が良くわかるのでした。

御自分で選ばれた遺影には相変わらず晴れやかな笑顔の林先生がいました。賑やかな先生に逝かれてしまって、寂しくなりました。万感の思いを込めて合掌致したいと思います。

(藤田保健衛生大学放射線科助教授)